

検定農家への情報提供

(増刊)牛群検定通信 No 72

平成29年1月

家畜改良事業団
T03-5621-8921

明けまして、おめでとうございます。
今年も牛群検定をよろしくお願いします。



牛群検定の利活用などについて、解説記事を掲載しています。

- 1 デーリイマン1月号 デーリイマン社
乳用牛のベストパフォーマンス発揮のために 牛群検定は経営の弱点を可視化する道具
家畜改良事業団信國卓史理事長と栃木県那須烏山市高瀬賢治氏の対談、牛群検定を話題の中心とした繁殖改善、改良など多岐にわたった対談を掲載
- 2 全酪新報1月1日号 全国酪農協会
牛群検定ワンポイントレッスンその43 冬の病気にご用心
冬は風邪に気をつけなければなりません。人間も牛も同じです。健康管理は万全に！
- 3 酪農ジャーナル1月号 酪農学園大学エクステンションセンター
牛群検定だより（第34回）似て非なる「平均産次」と「平均除籍産次」
平均産次と平均除籍産次の違いを明確にして、そこから牛群の産次構成、長命連産等について解説
- 4 LIAJニュース11月号 （一社）家畜改良事業団
新しい牛群検定成績表について（その45）
長命連産と産次構成（平均産次、平均除籍産次など）
長命連産が叫ばれています。実際に、長命連産を実現している農家の検定成績とは、どのようなものなのでしょうか？

冬は風邪と下痢に注意しましょう！

改善が必要な検定成績の見本 冬季での検定

牛コード	分 娩			搾乳又は乾日数	乳 量 (kg)				
	年	月	日		今 月	標 準	前 月	前 々 月	
					1回	2回	合計	乳 量	
0121	270906	1	♀	1	166	9.0	12.0	21.0	24.4
0017	270903	2	♂	1	169	17.2	10.4	27.6	34.6
0063	270825	3	♂	1	178	12.4	8.4	20.8	24.2
0120	270824	1	♀	1	179	6.0	8.0	14.0	26.6
0106	270811	2	♀	1	192	11.0	13.5	24.6	27.9
0003	270723	3	死産	1	211	14.0	15.0	29.0	32.9
0119	270721	1	♀	1	213	15.0	9.5	24.6	30.3
0118	270718	1	♀	1	216	14.0	10.0	24.0	29.6
0093	270619	2	♀	1	245	10.0	18.0	28.0	35.2
0074	270608	3	♀	1	256	8.0	8.0	16.0	22.7
0031	270530	2	♀	1	265	14.6	13.4	28.0	36.7
0098	270429	2	♀	1	296	13.0	12.8	25.8	36.2

乳量減少の記号（それぞれ前月と比較）
▽：10～20%減少 ▼：20～40%減少 ▼：40%以上減少 ※：分娩後60日以前に減少

1 検定成績表のチェック！
乳牛は寒さに強いと言われていますが、それでも冬はやはりカゼ(呼吸器病)や下痢(消化器病)に気をつけなければなりません。検定成績表でチェックしましょう。
乳量の減少は、図示した通り前月との比較で記号で示されます。冬季に気をつけたいパターンは、タテに大小の三角が並んだときです。楕円で囲んだようにタテに大小の三角が並んだときは、牛群全体でのトラブルが考えられます。寒気のせいで真空圧など搾乳機が不調になっていないか、給水器が凍結していないかなどを確認してください。もうひとつ大事な確認事項として、病気の蔓延があります。特に、冬季特有の病気が流行しやすい季節なので、注意が必要です。

2 冬季の病気の症状

冬季の牛の病気は、寒冷ストレスに合わせウイルスや細菌など様々な要因により発生します。呼吸器に症状の現れるものでは、RSウイルスやマイコプラズマ等が知られています。また、消化器に下痢の症状の現れるものでは、コロナウイルス等が知られています。これらは集団で蔓延しやすく、乳量を大幅に減少させる経済的に損失の大きな病気です。いずれにせよ、検定成績表で図のように乳量減少を示す牛が続出した場合は、緊急的に牛舎の牛を観察してください。発熱、下痢、咳、流涎、流涙、鼻水などの症状が出ていないか、特に子牛に蔓延しやすい病気ですので、子牛の観察も忘れずに行ってください。肺炎を併発して死亡してしまう子牛も珍しくありません。回復したとしても、発育に影響することが多く、発育不足から初産時の低乳量に繋がります。
牛舎の牛を観察し、ここにあげたような症状が成牛や子牛に蔓延している場合は、獣医師に相談するようにしてください。

気象庁の最新鋭ハイテク機アメダスの気象情報が、 検定成績表に表示されます！

当団では1月10日より、気象庁のアメダス気象情報を牛群検定に新しく導入します。酪農においては、暑熱や寒冷などの気象から受ける影響は極めて大きいものです。このことから気象情報を牛群検定に取り込み活用できないかとの声を受けて、実施するものです。

○利用できる気象情報は？

気象庁では、全国に最大で約21 km 間隔で約840カ所のアメダス(地域気象観測システム)を設置しています。図に示したとおり、検定農家一戸一戸について、距離的に一番近いアメダスを選び出し、そのアメダス気象情報を気象庁の情報支援を受けて検定成績と同様に提供します。検定農家からは最大で 21km、平均すれば約 10km 程度離れたアメダス気象情報を牛群検定で活用できることとなります。活用の出来るアメダス気象情報は、平均気温、最高気温、最低気温、降水量、日照時間、積雪の6項目。ただし、積雪は北日本や日本海側などの降雪地域のみに表示です。

ただし、検定農家においても日頃から気温を測り、アメダス気象情報とのズレや特性を把握しておく必要があります。

○具体的な情報提供は？

1月10日以降に発行される牛群検定成績表に検定立会日の気象情報が表示されます。さらに、北海道から沖縄まで全国で利用できる繁殖台帳 Web システムにアメダス気象情報情報を搭載する予定です。繁殖台帳 Web システムでは、1年 365 日のリアルタイムに近いアメダス気象情報の活用を図ります。なお、繁殖台帳 Web システムでは、スマートフォンやタブレットでの活用が可能です。

○暑熱対策への応用例は？

日本飼養標準によると、初産牛では平均気温が 23 度、経産牛(2産以上)では平均気温 21 度を超えると採食量に影響が出るとされています。しかし、ここでいう「平均気温」という概念は現実での把握が難しく、24 時間の気温を常時測定して初めて得られるものです。多くの農家では経験と勘により平均気温を判断し、暑熱対策を行っているのが実情です。牛群検定により正確なアメダス気象情報を入手することで、適切な送風扇の運用などを詳細な検討ができます。

○寒冷対策への応用例は？

子牛は寒さには大変に弱く、その限界温度は13度といわれています。特にカーフハッチなどにより、屋外で子牛を管理している場合、13度を下回ったら、ジャケットを着用させるなどの何らかの対策が必要となります。また、分娩房の気温も13度を下回るときは、分娩時に立会して羊水を拭き取るなど保温に関する配慮が必要です。こういった最低気温についても、アメダス気象情報が有効です。

○その他

飼料作物の圃場管理やサシバエ、遺伝的改良への応用なども考えられ、今後の大きな可能性が期待されます。

